

まとめ

以上、今回の学会発表中、我々日本の医療関係者と患者に最も興味深いと思われる報告を要約した。これらの発表を通してわかったことは、以下の三点である。

1. 西洋医学と伝統医療は相反するものであってはならない、この二つを組み合わせた治療を行うことにより、西洋医学一辺倒より高い治療効果を上げることができる。
2. アジアの伝統医療は女性の更年期症状治療に効果を上げており、HRT に変わる治療法を模索する欧米の医師や患者に大いなる恩恵をもたらす可能性がある。しかしここで問題となるのは、更年期症状は患者の生物医学的症状だけでは計れず、そこに文化的、社会的、個人体験的影響が加わって、症状の現れ方や感じ方が地域によってかなり異なっているという現実である。そのため世界共通のメノポーズ度測定基準というようなものが成り立たず、またアジアにおける伝統医療治療法は西洋医学治療法と異なり、個人単位で変化するため定量的評価が難しい。
3. 現在の単純化された生物医学の視点のみに基づいた研究では、伝統医療の正しい評価はできない。解決策として、社会学の視点を臨床研究の場に持ち込み、研究の視野をもっと広げていくことが必要である。つまり更年期治療の研究は学際的に行われて初めて正しく評価ができる。

さらに、現在日本で天野恵子医師を中心に女性専用外来で行われている治療方法 — 漢方治療を基礎に性差医療のエビデンスに基づいた西洋医学治療を組み合わせる方法 — の効果と正当性が、外国の研究者によっても証明されつつある、ということもはっきりした。今後は、日本の女性専用外来から集められる症例をデータベース化することによりエビデンスを集積し、女性専用外来における治療の安全性と効果を科学的に検証していく作業が不可欠である。また、西洋医学の治療と漢方を組み合わせることにより、従来の医療では対処しきれなかった症状に治療効果をあげることが可能であるならば、西洋医学教育を受けた女性専用外来担当医師に日本の伝統医療（具体的には漢方）を積極的に勉強する機会を提供するため、医師の再教育プログラムの中に漢方を組み込むことが望まれる。

あとがき — クアラルンプール所感

成田から夕刻のフライトでクアラルンプール国際空港に降り立ってまず驚かされたのは、飛行場の美しさである。みごとな近代的デザインの建築はサテライトからターミナルビルまでのシャトル・トレインの使い易さや、広々とした空間が与える安心感とマッチして、マレーシアが近代化された国であるという印象を与える。この空港は当時のマハティール首相の希望で日本の建築家、黒川紀章により建築され 1998 年に完成したそうである。

ところが、パスポート・コントロールに到着してみると、順番を待つ人々の列は延々と連なり、パスポートチェックを受けるまでには悠に 30 分以上かかった。外国人を歓迎する気がないのかと思わせるほど効率が悪い。外国からのフライトが次々到着する時間帯にも拘わらず、十分な数のスタッフを配置していないのである。税関スタッフはほとんどがイスラム教のブミプトラ¹⁸で、仕事のスピードものんびりしている。この時点でハードとソフト間のギャップに違和感を覚える外国人は筆者だけではなかった。



クアラルンプール国際空港内部

撮影：大橋富夫氏 (<http://www.kisho.co.jp/index-ie.html>)

空港を出てハイウェイに入ると、左右には植林されたあぶら椰子の林が続き、景色がとて美しい。成田空港から都内へ向かう排気ガスのたちこめる高速道路と比較して、マレーシアは日本よりもある部分では先進国なのではないかと思わせる。「このハイウェイをどう思いますか？」との運転手の問い掛けから、土地の人々がこの高速道路を誇りに思っている様子が想像できた。

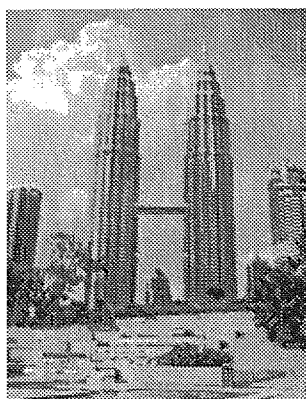
車は 1 時間以上かけてクアラルンプール市内に近づいた。町の中心部に鉛筆型をした、ダイヤモンドをちりばめたように輝く巨大な 2 本の塔が見える。国営石油会社ペトロナスが入るビジネスセンター、ツインタワーズである。この 2 本の塔の周囲には様々な摩天楼が林立し、日の落ちた薄暗い町は宝石箱をひっくり返したようにきらびやかである。「英語がへたくそなので十分な案内が出来なくてすみません。」と謝りながらも一生懸命説明する親切な運転手のおかげもあって、空港での長い「待ち」のことはすっかり忘れ、とても良いところに来た、というのが第一印象であった。

マレーシアは国をあげて「質の良い外国人（マレーシアにお金を落とし、かつ問題を起こさない人々）」の呼び込みに力をいれていると見える。その方法は裕福な観光客と国際会議の誘致である。観光客誘致については、9 月 9 日の NHK 朝のニュースによれば、

¹⁸ 添付資料 2：「マレーシアに関する基礎データ」を参照されたい。

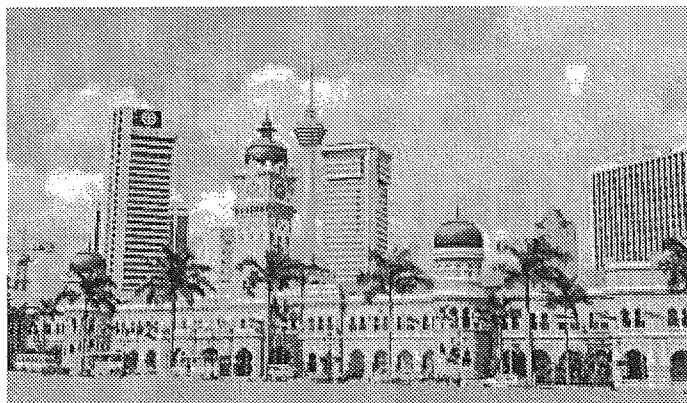
アラブ系の人々にターゲットをしばり、アラブ系専用の観光プロモーションビデオを中東の国々で放映したり、クアラルンプールの中にアラブ人街をつくったりしているという。アラブ系の人々は米国の 9.11 同時多発テロ以来、欧米諸国への旅行が難しくなり、行く先々で「テロリストではないか」と露骨に厳しい目でみられることが多くなったが、イスラム教国であるマレーシアはビザなしで彼らを受け入れている。アラブ人観光客は、一家総出で訪れるため、滞在日数も長く、マレーシアに落とす金額は一人頭に換算すると他の国からの観光客の 2.5 倍にあたり、平均 15 万円相当だそうである。

国際会議に来る外国人は知識階級の人々が多く、問題などは起こさず、金銭的にも比較的豊かであるため、やはり地元にお金を落としていく。会議初日のスピーチで、マレーシア女性家庭開発大臣が我々に、会議場にばかりいないで、是非町に出て観光をしてください、また、家で待っている家族のために是非買い物をして帰ってください、と何度も念を押していたことから、国の政策の方向性が良く理解できた。



ペトロナス・ツインタワーズ

(<http://fotoserver.tourism.gov.my/fotoweb/>)

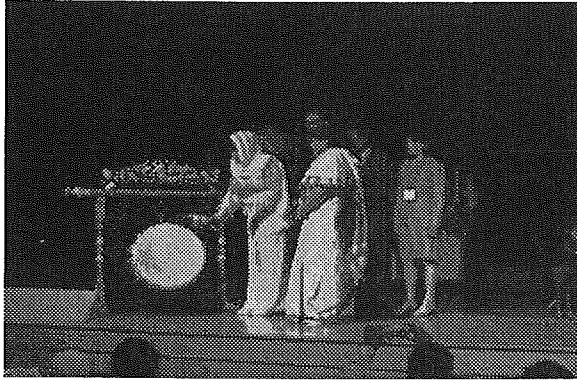


最高裁判所（元はサルタン Abdul Samad の邸宅）

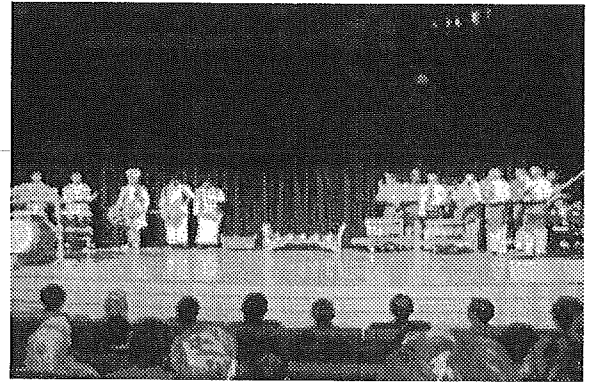
(<http://fotoserver.tourism.gov.my/fotoweb/>)

今回の国際会議に出席して受けた印象は、マレーシアでは時間厳守より、美的演出により力を入れているというものである。マレーシア・タイムとでも呼ぼうか、予定された時間通りに開始したプログラムはほとんどなく、第一日目のオープニング・セレモニーでさえも、予定時間を 40 分ほど過ぎて始まった。欧米や日本からの参加者は、一体何が起こったのだろう、と多少イライラしていたが、マレーシアの参加者にとってはあたりまえのことのようであった。

時間的には押し押しで、開始の遅れが目立つ運営であったが、代わりに参加者の感性に訴えようとする気配りは素晴らしかった。会議のオープニング・セレモニーでは、マレーシア女性家庭地域開発大臣による会議開催宣言が行われると同時に、舞台の上で待機していた楽隊が民族音楽の演奏を開始、様々な音色の異なるドラム中心のリズミカルな曲に合わせて、次から次へと様々な部族の衣装をつけたダンサー達が登場、それぞれにパターンの違う踊りを披露した。これは、Doa と呼ばれる土地の文化と芸術の香りに満ちあふれたパフォーマンスで、医療がテーマの国際会議の常識を破る、参加者の目と耳に訴えるみごとな演出であった。



↑大臣が太鼓をたたいて、会議の公式開催宣言



↑民族音楽の演奏 Doa が始まった

第1日目の夜には、マレーシア女性家庭地域開発大臣主催の祝賀夕食会 (Gala Dinner) が盛大に催された。この夕食会もマレーシア・タイムで、予定時間を一時間半以上過ぎて始まり、会議運営委員長と主催大臣のスピーチにつづき、マレーシアの人々の尊敬を集めているマハティール元首相夫人で、医師の Dr. Siti Hasmah Mohd Ali による歓迎スピーチが行われた。食事はマレー料理、中国料理、インド料理からなるコース料理で、同席した開催者の一人によれば、この組み合わせが典型的マレーシア料理であるとのことであった。食事の間には、今度は子供達による色彩豊かでリズムカルな Doa の踊りと、マレーシアの女性デザイナーによるファッションショーが舞台上で繰り広げられ、土着の芸術と欧米文化の融合した見事なショーが展開した。食事が終わるころには、男女の歌手 (夫婦) が登場し、エンターテイメントに徹した非常ににぎやかで楽しい夕食会であった。

インフラストラクチャーが整備されつつあるマレーシアは、すでに発展途上国とは呼びがたい。しかし、今後は社会開発が重要となってくる。マレーシア製の車は販売実績を伸ばし、町は外国車と国産車で溢れているにもかかわらず、町のどこにも歩行者専用の横断歩道が見当たらないのである。道路横断のタイミングを図り損ねるといつまでたっても向こう側へ渡れない状況に呆れ、現地の人々に、「どうして横断歩道がないの、これでは危ないじゃないの」と意見を求めてみた。すると「そうね、おっしゃる通りね」という反応しか返ってこず、市民意識がまだ十分に高まっていないという印象を受けた。

しかし、個人の権利の主張という意味での市民意識の高まりは、この国では望まれていないようである。会議の参加者の一人であるクアラルンプール在住のスイス人法律家からの情報によれば、「マレーシアにはデモクラシーは存在しない」という英米からの非難に対して、マハティール前首相はこう語ったそうである。「マレーシアでは、政治的安定確保のためにはある程度の政治的人権侵害は必要悪である。英国や米国流の、地域社会の利益より先に個人の利益を重視するデモクラシーではなく、この国にはよりコミュニティ本位のデモクラシー (group oriented democracy) が必要なのである。」マハティール首相退陣後もマレーシアは、この group oriented democracy (グループ単位の民主主義) によって欧米流の個人主義とは一線を画し、この国独自の民主化の発達を促しているようである。今後この国が民族間の対立を回避し、経済面でも社会面でも他国のモデルになることを祈りながら、三日間の会議を終え、美しいクアラルンプールを後にして、台風が接近中の東京へと帰路についた。

添付資料 1 : 会議プログラム

別添 PDF File

Women's Health & Asian Traditional Medicine (WHAT Medicine)

Promoting Complete Healthcare For Women

23 – 25 August 2005 Kuala Lumpur Convention Centre

添付資料 2 : マレーシアに関する基礎データ

➤ 政治形態と歴史 :

立憲君主制。独立後 48 年しかたっていない若い国である。

1511 年 : ポルトガルの植民地となる。

1641 年 : オランダの植民地となる。

1896 年 : 1824 年以來、マレー半島一部を占領していたイギリスが半島全体を植民地化する。

1941 年 : 軍により占領される。

1945 年 : 終戦と同時に再びイギリスの植民地となる。

1957 年 : 8 月 31 日に英国からマラヤ連邦として独立。

1963 年 : マラヤ、シンガポール、サバおよびサラワクのボルネオ 2 州で構成されるマレーシア連邦が正式に成立。

1965 年 : シンガポールがマレーシア連邦から独立し、自治都市国家を形成、マレーシアは現在の形となる。

➤ 総人口 :

2,545 万人 (2004 年推計)

➤ 人口構成 :

マレー系 50.3%

その他ブミプトラ¹⁹ 11.0%

中国系 23.9%

インド系 7.0%

➤ 言語 :

マレー語 (主要公用語)

英語 (第 2 言語)

➤ 宗教 :

イスラム教

仏教

ヒンズー教

¹⁹ ブミプトラとは現地の言葉で「土着の子」の意味。その大半はマレー人であるが、大別すると次の 3 つに分類できる。①半島部の先住少数民族であるセマン、ジャクン、セノイ、②半島部で人口の過半を占め、サバ、サラワク両州では少数民族であるマレー人およびマレー人社会に同化したスマトラ、ジャワなどからの移住者、③サバ州のサダザン、ムルット、クラビットおよびサラワク州のイバン、ピダユ、メラナウ。

http://www.jil.go.jp/jil/kaigaitopic/2002_08/malaysiaP01.html